Newsletter from the Free workers' federation

自由労働者連合

la Federacio de ChifonProletoj

BOTTOMS

第19号

Summer, 2019

5・1有象無象のレッツゴー★メーデーに対する

曽根崎署の暴力行為を弾劾する声明

私たちは実行委を結成し、5月1日、新天皇ナルヒト即位を真っ向から弾劾し、天皇制国家解体を掲げて「有象無象のレッツゴー★メーデー集会」を開催し、19時より大淀区民センターから扇町公園までのデモを敢行した。

その際、解散地点において警備の警察官から我々の仲間に対してあからさまな暴力行為が行われ、数名の負傷者を出したことに対し、担当した曽根崎署に対して以下強く抗議するとともに、声明を発表する。

私たちは6時から屋内で集会を行い、7時からデモに移った。デモコースは会場から扇町公園南西角（扇町公園テント村跡地）であったが、デモに対する警察権力の威圧は当初から激しく、人や車の往来の多い天神橋筋に出るや否やその牙を剥いた。

大淀署警備課はデモ隊先頭の横断幕の隊列とデモ隊右側隊列に絶えずプレッシャーをかけて、デモ隊の進行を妨害した。隊列先頭の進行を妨害しながら、後ろの警察車両の警備責任者は「公安条例違反云々」をスピーカーで町中に響かせ、街行く市民から我々を意図的な隔絶を画策した。

しかし、そうした中で「有象無象のレッツゴー★メーデー」に結集した仲間たちは横断幕を先頭にして、太鼓を打ちならし、プラカード、黒旗、赤黒旗、組合ののぼり旗を掲げ、「はんて～ん、レッツゴー」「レッツゴー、レッツゴー」「天皇制解体」「天皇制コスパ悪いぞ、税金かえせ」「商店街は日の丸おろせ」などのシュプレヒコールにあわせて、声を上げ続けた。そして野次と罵倒と警察の暴力的威圧に対して天皇制解体の声が響かせ、黒い横断幕や黒旗・赤黒旗が翻り、ナルヒト即位の夜の天神橋筋には騒然たる空気が渦巻き、新天皇即位を国民全員で奉祝させたい国家の意図を徹底的に粉砕した。

とりわけ天神橋六丁目から警備を引き継いだ曽根崎署（石崎警備課長）はデモへの暴力的威圧を増し、中でも我々に敵愾心を剥き出しにする大柄の署員Kは此処彼処でデモ参加者を押したり引っ張り回すなどの挑発を繰り返された。そうした目に余る警察の言動に対し、解散地点の公園に入る手前で警察の圧迫を跳ね返すべくデモ参加者は密集して「警察帰れ」「天皇制解体」「国家解体」のコールを響かせた。その時、先の横暴な署員Kはデモ隊に割り込み力ずくで仲間を突飛ばすという事態が生じ、この暴力行為により、仲間数名が転倒し、内2名の仲間の脚を打撲や捻挫により立ち上がれなかった。私たちに対し、なんらか個人的な不満が警察官にあったとしても、公僕としてデモ隊が車道を支障なく歩くことを保障することがその任務のすべてであり、にもかかわらずその鬱憤を晴らすがごとくの警察官による暴力的なデモ規制は、言語道断であり許されない。

すぐさま参加者は警察に対して抗議を開始し、その警備責任と謝罪を要求した。怒号と激しい追及の中、私たちは突き飛ばした署員Kに名を名乗らせ、警備責任者の石崎警備課長に対し、負傷した仲間に帽子を脱ぎ、頭を下げて謝罪させたが、こうした警察官による暴力行為が行われた事実を明らかにすると共に、曽根崎署に対し、以下強く抗議する。

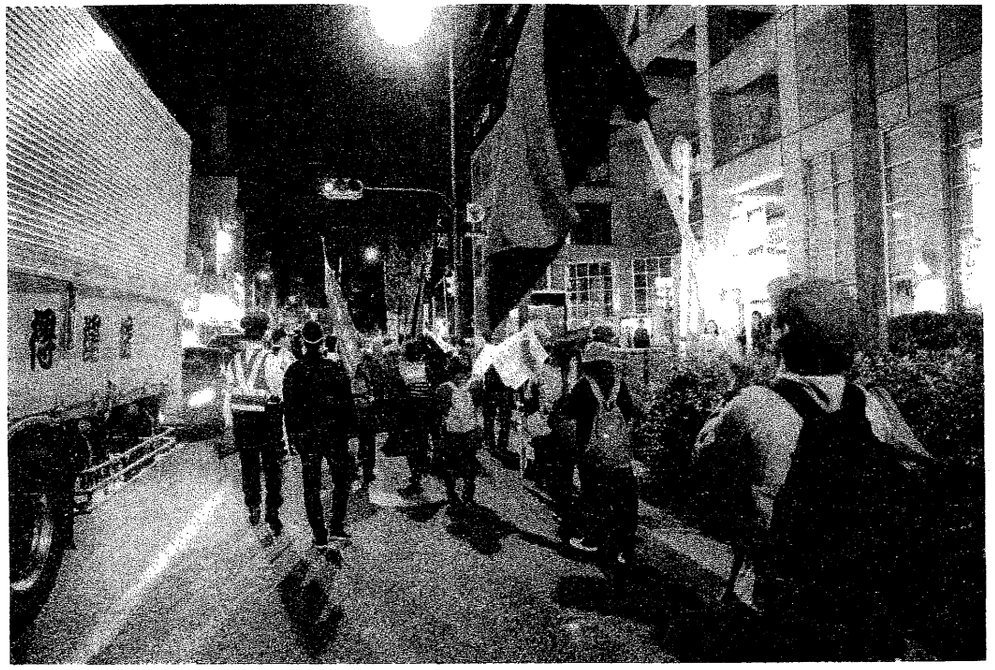
1）　曽根崎署は、今回の暴力行為に対し、正式に謝罪せよ！

2）　曽根崎署は、入院・加療した仲間への治療費を弁償しろ！

3）　曽根崎署は、二度とデモ隊に対し妨害をするな！

2019年5月22日

有象無象のレッツゴー★メーデー実行委員会



※その後、怪我の酷い1名の仲間は救急搬送され、「左足関節捻挫、左足下腿打撲傷」で約7日間の加療の診断を受け、現在も痛みを抱えながら日々の現場に立ち続けている。また、肋骨に痛みを抱えている仲間もいる。

このように把握しているだけでも3名の仲間を負傷させた曽根崎署を我々は断じて許さないし、新天皇・トランプ会談、大嘗祭、祝賀パレードなど引き続く天皇制強化の猛威に対して一歩も退くことはない。メーデーに新天皇即位をぶつけるなど労働者階級をナメきったアベ政権を打倒し、差別の元凶=天皇制国家の廃絶にむけて闘いをさらに前進させていくだろう。曽根崎署の暴力行為弾劾！非国民上等！国民統合粉砕！共に闘おう！

また、集会実行委員会としてはカンパも呼びかけています。

カンパ送り先：郵便口座番号　00960-6-145783　加入者名　自由労働者連合

振替用紙通信欄に「レッツゴーメーデー」とご明記ください。

齋藤緑雨 ― 近代日本の自由人たち(4)
「伝さんが　小便するや　秋の月」

長井瘋癲

1. 齋藤緑雨(斎藤緑雨　さいとうりょくう、1868 年 1 月 24 日(慶応 3 年 12 月 30 日) - 1904 年(明治 37 年 4 月 13 日))は、明治時代の小説家、評論家。本名・賢(まさる)。「正直正太夫」をはじめ、「江東みどり」「登仙坊」など別名も多数ある。その常識に捉われない機知は、アフォリズム集によくあらわれている。「ギヨエテとは　おれのことかと　ゲーテ云ひ」は特に有名。幸田露伴がつけたという戒名は「春暁院緑雨醒客」。

『アサヒグラフ　1951 年 6 月 13 日号』

士族の生れで町人に親しみ、伊勢に育って江戸を愛した文人。仮名垣魯文に戯作の伝統を享けて天稟の毒舌を磨き『小説八宗』などの批評集で明治中葉の文壇を騒然たらしめた。紅葉を「江戸ッ子の生れ損ない蔵を建て」と評したのなど名高い。外出には斜子(ななこ)の紋付に一楽の小袖というゾロリとした服装で一日中俥を待たせ鳥は浜町の筑紫に限るとか天麩羅は横山朝の丸新でなけりゃと贅を並べて通人を気取っていたがやがて出費に苦しみ、毒舌は内向して閃かず警句は冴えを失って愚痴となり最後に「僕本月本日を以て目出度死去致候此段謹告仕候也四月一日　緑雨斎藤」と新聞広告して1903年、我親愛なる正直正太夫はヒョックリ鶴と化した。38歳。[1904年歿]

2. 生涯

伊勢国神戸(かんべ、三重県鈴鹿市)の生まれ。少年時代は幼友達の上田万年と筆写回覧雑誌を出し、文才を示した。明治法律学校(明治大学の前身)中退。俳諧を其角堂永機(きかくどうえいき)、小説を仮名垣魯文(かながきろぶん)に学ぶ。『今日(こんにち)新聞』を振り出しに、『東西新聞』『国会』『二六新報』『萬朝報』など多くの新聞ジャーナリズムを渡り歩く。1889 年(明治 22 年)『小説八宗』により文壇に登場、以後、戯文批評に才筆を振るい、『初学小説心得』『小説評註問答』『新体詩見本』などで文壇人を揶揄嘲笑し、さらに 1896 年、森鴎外幸田露伴と匿名合評『三人冗語』を雑誌『めさまし草』に掲載。樋口一葉の真価を理解し、交友を持った。早逝した一葉を惜しむ気持ちは強く、『一葉全集』を校訂した。一葉は「この男かたきにとりてもいとおもしろし。みかたにつきなば猶さらにおかしかるべく」とその印象を日記に書き記している。一方、うぶな男の色道修行の悲劇を描いた『油地獄』(1891)や、花柳界における恋のさや当てのなかを巧みに遊泳する青年を描いた『かくれんぼ』(1891)により小説家としての地位を確立、ほかに『門三味線』(1895)などがあるが、小説家としての才より辛辣かつシニカルな風刺家として知られた。軽妙な文章とパロディー精神は明治文壇にあって異彩を放ち、「按(あん)ずるに筆は一本也(なり)、箸(はし)は二本也。衆寡敵せずと知るべし」は一代の名句として知られる。1904 年(明治 37 年)4 月 13 日、「僕本月本日を以て目出度死去致候間此段広告仕候也」と死亡広告(翌 14 日に『萬朝報』に掲載)を遺し、東京市・本所横網町の自宅で病死。

3. 逸話　師岡千代子『斎藤緑雨の思い出』文芸春秋 1937 年

(幸徳)秋水の朋友知人の中でも、緑雨氏は秋水の母親に最も人気のあった人である。母は緑雨氏の来訪を心から歓迎したばかりでなく、「斎藤さん、斎藤さん」と蔭でもよく噂していた。秋水の知己には斎藤姓を名乗る人がいく人もあったので、私は最初母のしばしば口にする斎藤さんなる人が、誰れのことであるのか見当が付かなかったが、間もなく、それが正直正太夫であり緑雨氏であることを知った。それにしても、なぜ母が秋水の数ある朋友知人の中で、特に緑雨氏をあんなにも好んでいたのであろうか。想うに、世情に通じた緑雨氏が並外れて親切な人であり、江戸っ子らしくどこかきびきびしたところのあるのが、ひどく母の気に入っていたのであろう。事実秋水の留守の間など、田舎出の年老いた母を相手に世間話しをされるのは、緑雨氏だけであったように記憶している。

…緑雨氏は時間を無視した長尻の人であったが、どんなに多忙な時でも、秋水はそれを不愉快がりはしなかった。そしてその長い対談に、ただの一度として退屈した容子さえもなかった。秋水には人の知らない奇妙な癖があって、来客が不快な時や話しに退屈した時には、紙縒(こより)で犬を造って机に並べるのであった。で、その犬の有無や数によって、大体は秋水の気持ちや客の性質を知ることができたが、人によっては、一度に五六匹の犬を見受けることがあった。しかし緑雨氏の場合にはいつの日も一匹の犬も見受けなかったばかりではなく、いつも帰りには、秋水の方から送って行くほどであった。そしてそのまま送り狼になってしまうことさえあった。

…ある日、昼過ぎから夜更けまで話し込んでおられた緑雨氏を、いつものように送って行こうとする秋水が、門前で不作法にも用達しを始め出した。すると緑雨氏は、門まで見送って出た私に向って、突然、「奥さん」と声を掛けられてから、「**伝さんが小便するや秋の月**」と一句吐かれた。そして、自分から珍らしくも大声で笑い出されたが、秋水もまたそれに同じて朗らかに笑っていた。やがて「お寝みなさい」と云われたかと思うと、秋水とともにすたすたと立ち去って行かれた。私は門前に佇んだまま、月光の中に消えて行く二人の姿を見送ったが、それは忘れもしない名月の夜のことであった。

…秋水はまれにみるほど入浴嫌いな人間であったが、その反対に緑雨氏は入浴好きな江戸っ子であった。「二銭乃至二銭五厘の湯銭をもっても、人は快を取ることを得る者也」と、例の皮肉な調子で、緑雨氏は何かに書かれていたようであるが、この話の当時は、まだ湯銭はわずかに一銭三厘であったと思う。

可笑しなことには、入浴嫌いの秋水が、入浴好きな緑雨氏を訪問すると、必ず一銭三厘の愉快を味わってくるのであった。そんなことから、私は秋水があまり入浴しない時など、それとなく緑雨氏訪問をすすめたものであるが、私の嫁ぐ以前には母もその手を用いていたとのことである。

参考資料

玉川信明『日本番外地の群像』社会評論社　1989 年
吉田孝雄『飢えは恋をなさず　斎藤緑雨伝』筑摩書房　1989 年
ウェブサイト「コトバンク」など

台湾「火焼島送り」「島流し」をめぐる

中野正剛と田健治郎の国会論戦からみえるもの

金羽木徳志

１９２０年の第４４回帝国議会の台湾ニ施行スベキ法令ニ関スル法律改正案上程に際して中野代議士による関連質問台湾の原住民に対する島流しに他ならない『浮浪者対策』に関する政府非難に対して、１９１９年１０月２９日に第８代台湾総督に文官から初めて就任した田健治郎の答弁を安平政吉が書いた「台東開導所について」(『人足寄場史』人足寄場顕彰会／創文社)から読んでみます。

「同議会での中野代議士の質問に関する議事速記中にいう。「わたしは問ひたい。幾多の残忍なる事が台湾に伝へられて居る。台湾の学生でも、何でも本島に於いて耳卯か不穏な言動をなせば、行政処分を以て、之を島流しにすることが出来る。その島流しの期限は、無期限である。台湾総督の一存で陛下の臣民をかかる考慮なき処分に処し得るといふことは、私は大変な間違ひではないかと思ふ」と。しかし、不穏の言動あるがゆえに、火焼島送りにするという中野代議士の攻撃は、事実に反するものであった。そこで説明役の田総督は、台湾に「浮浪者取締規則」というもののあること、その適用としては火焼島送りをしていたこともあるが、現在では「岩湾」に施設を移していること、なお現在では、浮浪者処分に付すべき者は、まず一応警告を発し、その警告を省みずして、なお不都合の行動を行ったときは、台湾総督に具状して、その認可を得て、はじめて浮浪人取締を施行することに改めている旨を答えたのであった。」

安平が中野代議士の攻撃－不穏な言動あるがゆえに、火焼島送りにする－は事実に反すると書いたのは安平個人の自由です。そして、安平のこのような書き方は中野代議士の『火焼島送り』、『島流し』の名称は、一躍して内地一般社会人に対し、あたかも台湾統治の暗黒面なるが如き感じを与えたことに対する火消しと言ってもいいでしょう。しかし、この第４４回帝国議会から７０年以上も過ぎた１９７４年頃になって台湾統治の火消しをしてどうしようと言うのかと言いたくなりますが、ここにも今現在になってもまだ台湾統治にこだわる右翼主義者たちのあきらめの悪さの片鱗を読み取ることができます。その上で言わせてもらうなら、ここで安平が中野代議士の攻撃は事実に反していると書く必要があったのは、台湾統治の暗黒面の火消しをしなければならなかったのは、事実として中野代議士が言うような幾多の残忍なる事があったのか、台湾の学生まで本島に於いて耳卯不穏な言動をなせば、行政処分を以て人間の住むに適せざる火焼島に無期限で島流しに処していたのかについてではないでしょうか。

もし（歴史にもしというものはありませんが)、事実として学生まで浮浪者として島流しにしていたとすれば、それは職権乱用の違法行為です。それこそ台湾統治の暗黒面ではありませんか。しかし、植民地支配される側にすれば、そこに『合法』も『違法』もないでしょう。植民地支配はいつだって不当極まりないものではありませんか！しかし、安平も田総督もそれについては触れていません。だからと言って事実として学生までも島流しに処されたとは即に言えないし、逆に学生までは島流しに処されなかったとも言えません。中野代議士のこの時の発言を裏づける資料がみつからない以上、安平のこの文章だけでは何とも言えないでしょう。つまり、植民地台湾での『浮浪者対策』について研

究が進んでいないのです。せいぜい、台湾で食いあぶれた日本人が『行路病者』、つまり行き倒れた者として施設収容されていたことが今月になってわかったぐらいです。

話を戻しましょう。安平のこのような恣意的な書き方で台湾統治の暗黒面の火消しをしたにもかかわらず、結果として、そうか！台湾の浮浪者対策は学生までも島流しにしたのか！とわたしたち『内地一般社会人』に対して、あたかも台湾統治の暗黒面なるが如き感じを与えることになっていることは否定できないでしょう。

中野代議士の攻撃に対して、田総督は中野代議士が言うような、台湾の学生だろうと何だろうと不穏な言動があっても、いきなり捕まえて島流しにするようなことはない。ちゃんと順を追って対応していると反論します。しかし、どう順を追って対処しようと丁寧に対処しようと島流しは島流しです。刑罰であることには変わりません。一方的に「浮浪しているから」、「生業を持たないから」、「不穏な言動があるから」と決めつけられて島流しにされたのではたまったものではないでしょう。田総督の答弁を聞けば火焼島送りをやめて、その対岸にある台東の岩湾に施設を移したことで改善したとも受け取れそうですが、実はそういう意味で施設を移動したわけではありません。火焼島の『浮浪者収容所』があまりにも遠すぎて物資の供給も届かなければ、行政の手も届かないという、本末転倒なことなったために岩湾に移動したのです。

当然ながら田総督のこのような答弁は中野代議士を納得させるものではありませんでした。繰り返しますが、中野代議士が怒っているのは同じ皇国臣民の台湾の原住民が浮浪者として島流しになっていることであって、それが火焼島だろうと岩湾だろうとそんなことはどうでもいいことであってそれによって怒りのトーンが変わることはありません。

さらに中野代議士の攻撃は続きます。「要するに総督の答弁は、自己の功名を、自己の得た報告、自己の一人の判断によって述べているにすぎない。質問に対しては、何等肯綮(こうけい、筆者注／急所の意味)に触れるのはない。」と人格非難攻撃です。まさにディすりです。田総督の答弁をどう要するとこんな話になるのでしょうか。それにしても、一体この新参者は田総督のどこをいじくっているのでしょうか。

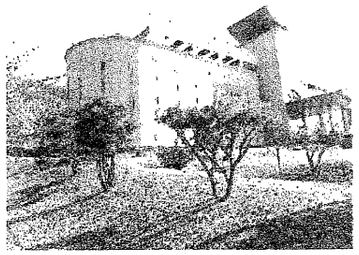
しかし、貴族議員であり、男爵であり、逓信相を務めた田総督ともあろう者がこんなポッと出の新参者相手にいちいちむきになってしまってはその名声が地に落ちます。安平の文章を読むなら、「感情にとらわれない、さすがに初代民間総督として正しく、自分は事実を挙げましたが、それが、自家広告をするという御叱りを受けて甚だ迷惑に存ずる。しかし、私は事実を申上げればよろしいので、それを御批評ならうと、それは、質問の趣旨ではない。」と答弁しました。

はたからみれば、中野代議士と田総督のどっちが事実を言っているのかわからないのですが、中野代議士の主張が中野代議士にとっての事実であり真実なら、田総督の答弁もまた田総督としての事実であり真実ではありませんか。双方がそのような立場に立つ限り相手がウソを言っていることは言うまでもないでしょう。当然、相手に反論されたからと言って「はい、そうです。すみません」と言っていたのでは政治家はつとまりません。そんな素直さが何の銭になりますか。

だいたい台湾の原住民を浮浪者として取締り隔離収容して皇国臣民として更正させようとする植民地政策が土台まちがっているのであって、それについて水かけ論を演じる方がどうかしているのですが、アリスミラーの指摘「教育者こそが教育を必要とする！」に倣うなら、植民地の支配者こそが植民地政策を必要とする！と言うことです。

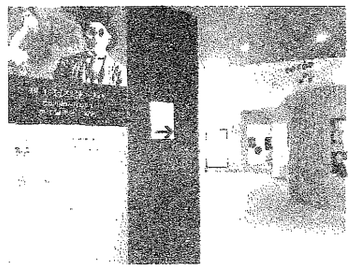
朴烈義士記念館を訪ねて

黒蜘蛛の松五郎



地方に向かう人々が忙しく行きかう朝の東ソウルバスターミナルで乗った満員の高速バスは、お世辞にも上手いとは言えない運転。バスに揺られて2時間余り、終点の聞慶市外バスターミナルに着く頃には昼を少し回っていた。郊外らしく辺りは寂しい。小さく殺風景な待合所でソウル行きの高速バスを待つ数人のおばあさんが世間話に花を咲かせている。空腹なので一軒の食堂に入った。高齢の夫婦で営んでいるようだが、昼時だというのに客はぼく以外に中年男が一人。しばらくして運ばれてきたコチュジャン味の焼うどんを食べていると、ここは朴烈が生まれ育った土地である事を改めて感じた。2018年11月15日、ぼくは朴烈義士記念館と金子文子の墓を訪れようとしている。

朴烈に関して知っている事の殆どは金子文子を通してである。初めて金子文子を知ったのは定時制高校生の頃読んだ「何が私をこうさせたのか」を収めた『ドキュメント日本人　反逆者』(学芸書林)というアンソロジー集だった。因みに大杉栄や古田大次郎を知ったのもこの本だった。貧困と差別に立ち向かう文子の激しい姿は、在学していた定時制高校で鋳物工などの工員や準看護師、そして在日コリアンなどと社研活動を始めたばかりのぼくにとって力強い励ましになった記憶がある。再び文子と出会ったのは、20代の初め頃読んだ瀬戸内晴美『余白の春』だった。これによって朴烈、金子文子をめぐる時代背景、闘いの詳細を知った。玄界灘を超えて共通の敵である天皇制帝国主義を打倒する闘いの息吹を感じることができた。そして2018年3月、大阪アジアン映画祭で観た「朴烈 植民地からのアナキスト」は、天皇制帝国主義によるむき出しの暴力に立ち向かう二人と仲間の激しい姿を描きながらも、豊かで大らかな感性と生命力を画面一杯に表現した。終演後、会場を包んだ力強い拍手がしばらく鳴りやまなかったのも二人への共感の表われだ。こうして朴烈と金子文子は、ぼくの前に3度立ち現れ、その度に力強い励ましを残していった。4度目はこの旅である。



バスターミナルに戻ると一台のタクシーが客待ちで停車していた。運転手は退屈そうに文庫本を読んでいる。タクシーは小高い丘に向かって畑道を10分程走ると現代的で大きな建物が見えてきた。朴烈義士記念館だ。玄関前に降りると中年の女性職員が熱心に落ち葉を掃く手を休めてお辞儀をして迎えてくれた。職員は一緒にエントランスに入ると小さなカウンターの上に置かれたノートを指さす。来館者の氏名、住所を書くようなので日本語で書いた。今日の来館者の名は3名あったがハングルだった。過去のページをめくつてみたが日本語は

見当たらなかった。ぼくが日本人であることを知った職員は、エントランスから下に見える小さな丘と碑を指さしながら韓国語で説明するが「カネコフミコ」の言葉しか分からなかった。どうやら文子の墓を教えてくれたのだ。日本人への温かい配慮にお礼を言う。

展示会場に一歩足を入れた時、入口で一枚のパネルが先ず目に飛び込んできた。それはとても衝撃的なものだった。しばらくパネルを凝視せざるを得なくなった。冠を被り束帯衣装を身に着けたヒロヒトの肖像写真の隣にアナキストを現すⒶのマークを並べたコラージュだった。それはまるでアナキストのマークがヒロヒトを覆い被されるようだった。そして気づいた。Ⓐは朴烈、金子文子なのだ。二人がヒロヒトに飛びかからんとしている姿なのである。今も二人は天皇制帝国主義の喉元を食いちぎろうとしているのだ。それを作者は表現し、記念館は理解してわざわざ会場入口に掲げているのである。記念館を運営するのは財団だが、代表は聞慶市長で行政が全面的にバックアップしている。行政が支援していることから正直言ってあまり期待はしていなかった。「えん罪事件」、「被害者」としてまつり上げられ志が捻じ曲げられ牙を抜かれてしまった事例を見てきたぼくは、良い意味で裏切られた。二人のアナキストとしての志を真正面から受け止める韓国の人々、聞慶市民、記念館、そして作者に心から敬意を表したい。

展示会場を一巡して、屋外の階段を下りて金子文子の墓に向かった。毎日掃除を欠かさないのだろう手入れが行き届いた小さい広場に、韓国式に丸く土を盛られた文子の墓が碑と共にあった。その斜め隣に朴烈の記念碑が並ぶ。手を合わせていると感慨深い。何気なく手にした本に収められた「何が私をこうさせたのか」を読んで半世紀足らず後、まさか、こうして墓参をするとは夢にも思っていなかった。今まで励まされてきたことへの感謝を念じた。文子の碑に刻まれた発起人の名前の中に栗原一夫があった。文子が獄中で綴った手記を託したのが栗原で、彼の手によって編集、出版された「何が私をこうさせたのか」によって、今日、ぼくたちは朴烈、金子文子を知ることが出来る。栗原が「不逞社」に参加した期間は、二人が逮捕されて休止したことから2ヶ月間と極めて短い期間であった。栗原は獄中の二人を差し入れ、接見、公判支援など身を挺して支援し続け、戦後も文子の生家に碑を建てるなど力を尽くした。栗原を何がここまで駆り立てたのだろうか。たった2ヶ月間親交しただけで50年近くも支援出来るとは常識的には思えない。栗原は沈黙を貫き1981年没した。

再び、館に戻ると職員が電話で帰りのタクシーを呼んでくれた。しばらくすると事務所から青磁の茶碗に淹れた茶をもって来てすすめてくれた。木枯らしに冷えた身体に嬉しかったし、何よりも二人の意志を大切に思う韓国の人々の温もりに感謝しながら頂いた。

大阪に帰ったのと奇しくも同じ日の11月17日、韓国政府は金子文子に「建国勲章愛国章」を追叙し独立有功者として認定したとの報を知った。

※文中の写真は筆者撮影

わたしたちは今、あなたたちと共にあります！

釜ヶ崎の労働センター閉鎖に対する抗議声明

３月３１日、大阪府はかねてから提示していた釜ヶ崎の労働センター(あいりん労働公共職業安定所)の閉鎖にふみきりました。大阪府曰く、労働センターの老朽化、耐震性の問題と言うことですが、とりあえず、大阪府のそんな言い分はどうでもいいことです。大阪府は物件家屋の心配よりもセンター周辺で生活している日雇労働者、野宿者たちのことを心配しろ！追い出しをやめろ！これまで、その労働行政としての業務を公益財団法人の西成労働福祉センターに肩代わりさせ、職安の施設内で手配師、人夫出しの手合いの輩に丸投げしてピンハネを容認してきた職安が、いったい何を今さら思い出したかのように建物の耐震性云々などと利いた風なことを言っているのでしょうか。１９７０年の開設以来５０年間、真っ当な職安業務をやってこなかった職安です。一度も職安として求人を出したことのない職安です。アブレ賃の受付と支給以外は１６番窓口しか開いていない職安です。これのどこが職安なのでしょうか。全く悪い冗談としかおもえません。今さら物件家屋がどうなろうと大した関心事ではないでしょう。

しかし、どうでも良くないことは、この労働センター閉鎖が『平成』から『令和』に変わる天皇代替わりのワレもワレもと何にワクワクしているのかわからない社会状況の中で起きたということです。これは明らかに『平成』から『令和』、アキヒトからナルヒトへの天皇代替わりの中で起きた釜ヶ崎の日雇労働者、野宿者という社会の『異端者』に対する暴力であると銘記する必要があります。なぜ、市民社会が３月３１日、『平成』さいごに向けて何かにとりつかれたようにカウントダウンを数え、翌日の新元号発表を前に沸き立っている時に日雇労働者、野宿者たちは生活を破壊されなければならなかったのでしょうか。いえ、釜ヶ崎の日雇労働者、野宿者たちにも『平成』さいごをカウントダウンして新元号発表に胸をワクワクさせろ！などとは言うつもりはありません。あるいは市民社会と日雇労働者、野宿者たちの状況を対比してその不公平さを強調しようとも思いません。言いたいことは、労働センター閉鎖策動が天皇代替わりの中で起きた釜ヶ崎の日雇労働者、野宿者という社会の『異端者』に対して、ナショナルなものにそぐわぬ者として、どういう形であれそこからいなくなることで新元号発表、新天皇に対する祝賀を強いたということです。

そして、見逃してはならないことは、この労働センター閉鎖策動が『旧優性保護法』のもとで断種を強いられた障害者たちが救済対象として社会的にクローズアップされている同時代に起きたということです。言うまでもなく差別の解消は同時並行でなければなりません。ある被差別集

団は救済対象にするが、こっちの被差別集団は差別に晒してもいいと言う理屈はありません。裏を返せば、こっちの被差別集団を差別や暴力に晒していると言うことは救済対象にした被差別集団もまた、善意による差別に晒していると言うことです。

３月３１日、この日もいつもどおりに朝５時にセンターのシャッターは開き、いつもどおりに夕方６時にはシャッターはおりる予定でした。もっと正確に言うなら釜ヶ崎における時間とは朝５時になったからセンターのシャッターが開くのではなく、センターのシャッターが開けば朝５時であり、夕方６時になったからシャッターがおりるのでなく、シャッターがおりれば夕方６時なのです。炊き出しであれシェルターであれ、人々が並べばその時間です。それがここでのいつもの日常のひとこまであり、端からみれば同じにしか見えない、こっそり取っ替えてみたところでわかりはしない擬人化された空瓶や石やペットボトルの列こそがここニシナリの時間が何の滞りもなく動いていることの何よりの証左に他なりません。

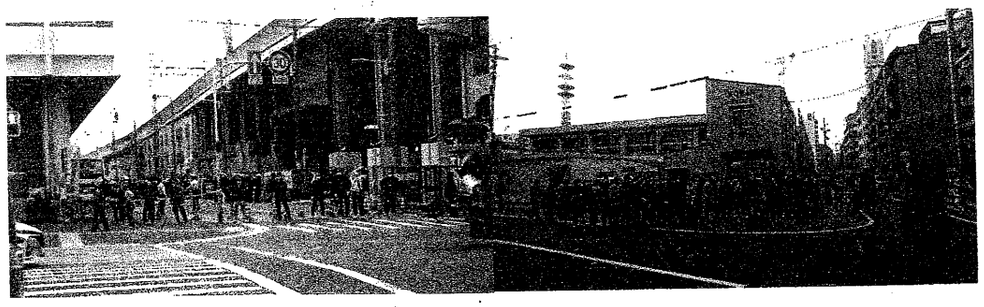
しかし、いつもと違うとすれば３月３１日を持ってセンターは閉鎖されるということでした。当然、センターを管理する大阪府も、かねてからセンター閉鎖反対！をぶちあげている諸団体・諸雑派による多少の騒ぎは想定しているとは言え、おおむねセンターの管理業務には言うほどの支障があるとは考えられないし、予定どおりにセンターを閉鎖できると言ったところでしょうか。かりに多少の騒ぎが起きたとしても、国家の中にある別の国家とも言うべき、様々な立場に基づいて、『釜ヶ崎』、『ニシナリ』、『あいりん地区』と呼ばれるこの地域の現状には何の変化もおよぼさない、その騒ぎでさえもここでは日常のひとこまでしかありません。しかし、それでも社会の虚偽は打たなければなりませんし、関の声をあげなければなりません。そのような思いを持って結集したセンター閉鎖に反対する約３００人の人々によって大阪府の目論見は打ち砕かれたのです。大阪府は４月１日未明に「今の状態ではセンターのシャッターは閉められない。今日はシャッターを閉めません」と言って引き上げて行きましたが、その背景には大阪都構想を掲げたＷ選挙期間中だったことやＧ２０大阪サミットを前にして思い切った動きがとれなかったことがあったのかも知れません。しかし、いずれにしても、大阪府のセンター閉鎖策動の目算があまりにも甘すぎたことは否定できないでしょう。

この日を機にセンターは２４時間開放の自主管理になりました。このこと自体が特筆すべきことなのですが、それよりもまして、まずセンター周辺で生活している日雇労働者、野宿者たちとはいったいどのような存在であるのか、あらためてわたしたちは思い知らされることになったのです。どこからか騒ぎを聞きつけて大きなテレビカメラをかついでアタフタアタフタやって来たテレビ局の取材に高齢の野宿者が「ワシら、ここを追い出されたら行くとこないんや！」と言います。この人にとっては、立んぼ人生あじなもの、ここは天国、釜ヶ崎だったのかも知れません。

しかし、それがこの人だけではなくセンター周辺で１００人以上が生活していることを目の当たりにすれば、ここはいったいどうなっているのかと言わざるをえません。テレビのニュースをみれば、この人たちの年金は？家族は？仕事は？生活保護は？日雇労働って何？と誰だってそう思うでしょう。しかし、その当たり前のことがここでは行政的に、国策として不完全にしか保障されていないのです。

資本主義を肯定するつもりは１ミリもありませんが、誤解をおそれずに言うなら、その時代、その社会状況に見あった収奪があるはずです。手配師も人夫出し業者も所詮は口入れ稼業であり、仕事を斡旋した見返りにデズラの上前を掠めるケチな商いに過ぎません。そうだ！これは人身売買ではありませんか！こんな前近代的な業種が今も人材派遣業というひとつのビジネスとして社会に定着し、東北被災地もこれに頼らなければ復興も原発処理もできないのです。いったい日本列島のどこの公共職安が求人紹介を手合いの輩に丸投げしてピンハネを容認しているところがあるのでしょうか。さらにどこの地方自治体に結核発生を長年に渡って放置している知事がいるのでしょうか。そんな行政の長など聞いたことがありません。つまり、センター周辺で生活している日雇労働者、野宿者とは、まがりなりにも豪語している民主主義の法治国家であれば、当然ついてくるはずのありとあらゆる法律や施策から排除された、釜ヶ崎の本質的な問題であり、根源的な問題を体言化している者たちではありませんか。

にもかかわらず、いや、だからこそと言うべきですが、ここ釜ヶ崎では『違法』が『合法』とされ、それに異議を唱える者が『違法』として、『犯罪者』として何人もしょっぴかれて行きました。しかし、警察も裁判所もわたしたちの主張には何も答えることはありませんでした。これはもう言葉を越えています。４月２４日、大阪府は大量の警察にガードされた中でセンターを閉鎖しました。吉村新大阪府知事はテレビでセンターが開放されている状態を違法だとコメントしましたが、いったいどうすればこんなことが言えるのでしょうか。よしそれが『違法状態』だと言うのなら、職安の施設内で堂々とピンハネしている手合いの輩を一度でも取り締まったことがありますか！未だに放置じゃないですか！



釜ヶ崎の状況が端からみれば明らかに『異常』なことですが、しかし、それはそのように感じた者の価値観であり、常識でしかありません。なぜなら手合いの輩を容認する『あいりん労働公共職業安定所』はここでもれっきとした職業安定所という公的な労働行政であり、わたしたちを弾圧する西成警察署はここでもれっきとした法の番人であり、警察としてその業務を果たしているにすぎないのです。それが今日も１日何事もなく終わること以外何も望むことはない釜ヶ崎でのいつもの日常のひとこまであり、『正常な状態』なのですから。だからこそ、わたしたちは関の声を挙げなければならないのです。なぜなら権力によって一方的に『違法』を投げつけられセンターから追い出される形で暴力に晒されている
人たちが現に目の前にいるからです！人が生きることに罪はない！と言わなければならないからです！

わたしたちは今現在、センター周辺で権力との緊張関係の中で生きている人たちを全面的に肯定します！わたしたちは今、あなたたちと共にあります！全ての人の生に心からの敬意と祝福をこめて！

2019年5月19日
釜ヶ崎パトロールの会
自由労働者連合
有象無象のレッツゴー★メーデー実行委員会

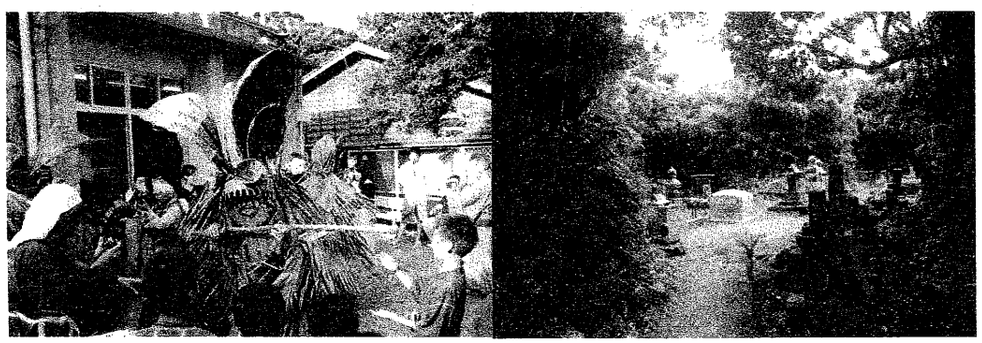
南島逍遥（２）トカラ列島～とり残された「みちの島」

南野流人

「当時ソノ間フトコロアルヲ知ラズ、ココニ至ッテ放擲モマタハナハダシ」

白野夏雲『七島問答』

高校の頃に観た古いモノクロフィルムに映し出された東南アジアや南太平洋諸島の先住民族の習俗を思わせる仮面来訪神ボゼ。毎年、旧暦のお盆に悪石島に現れる山の精霊である。後年、鹿児島県立博物館で硫黄島のメンドンや甑島のトシドンなど南九州の仮面来訪神と共にボゼが常設展示されていたのを見学した。東南アジアや南太平洋諸島に色濃いルーツを持つ南九州の先住民族・隼人の文化を現代に継承していると思わせるボゼが現れる吐噶喇（トカラ）列島の悪石島へ行って、ボゼ祭りを観るという念願が叶ったのは、昨年の夏だった。



薩摩と奄美との狭間で

吐噶喇（トカラ）列島は、屋久島と奄美大島の間にある口之島～宝島までの南北 130km にわたって連なる北斗七星のような島々である。トカラが文献に初めて登場するのは、『日本書紀』白雉五年（654）「夏四月吐火羅国男二人。女二人。舎衛女一人。被風流来于日向」という記事である。

中世以来、トカラは鹿児島（日本）と奄美（琉球）の狭間で翻弄されてきた歴史をもつ。平家落人伝説を今に伝えるトカラは室町時代に種子島氏が支配し、琉球王国の勢力圏に入ったこともあり、江戸以降は島津氏の直轄支配下に置かれた。1609 年の薩摩の琉球侵攻の折、薩摩軍の水先案内人として七島衆が動員されてもいる。外部の圧倒的な軍事力に為すすべもなく翻弄され零落した島の状況に、平家の末裔に自らを擬した島民の心情が重なり合う。

1897 年に大島郡に移管して以降は七島の北部にある竹島、硫黄島、黒島の口三島（上三島）を沖七島（下七島）にあわせて大島郡十島村（ジットウソン）と言っていたが、日本の敗戦によって 1946 年に北緯 30 度線以南（つまりトカラ列島から南）は米軍統治下となり、旧十島村は三島と七島に分断された。1952 年沖七島の本土復帰（再併合）後は三島村と十島村に分立。奄美群島が 1953 年に本土復帰（再併合）されるまでの 8 年間、日米間の国境線の引き直しを横目に、トカラ列島の島民たちは口之島、宝島、屋久島の近くの口永良部島を密貿易拠点として奄美大島－鹿児島間での密航船による密貿易を盛んにおこない、海洋民の自力自闘の気概を今に伝えている。

島民の生命線＝村営フェリーとしま

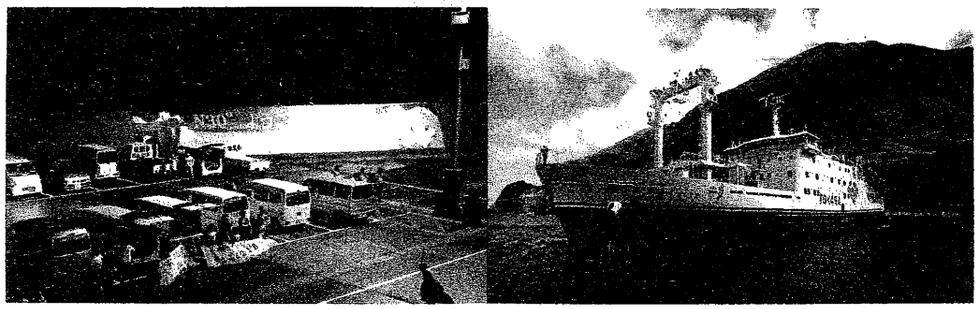
2018 年 8 月 21 日、大型台風 19 号の直撃でフェリーが欠航して鹿児島港に 3 日間足止めされ、24 日にようやく出航した。観光客は少なく、同じく足止めされていた多くの島民が 2 等客室から溢れて廊下やロビーで慣れた風に雑魚寝していた。今回の大型台風によって十島村では幸い死者は出なかったものの、停電が続き、NTT や携帯会社の電波塔が倒壊し、土砂崩れや家屋の倒壊などインフラに打撃を被った。フェリーには生活物資を鞄いっぱいに抱えて帰島する島民たちの他に、災害復旧の資材とともに作業員たちが多く乗り合わせ、彼らの話では緊急を要する島を中心に沖七島の北端の口之島から南端の宝島へと順番に復旧していくという。

現在の十島村役場は村の最北端の口之島から北上すること 200km も離れた鹿児島本土の鹿児島市泉町にある。役場から港へ少し歩けば、名瀬と鹿児島の 425km を結ぶ週 2 便の「村営フェリーとしま」が発着する南埠頭がある。トカラ列島の島々には飲料水の自販機の他には、フェリーが到着した時に積み下ろされる僅かな食料品と生活用品をコンテナで即席販売する「直売所」が不定期に開くのみで、医薬品や衣料品、食料品などあらゆる生活必需品のすべてを奄美大島や鹿児島に渡って調達しなければならない。この村営船はまさに 7 島 700 人島民の生命線である。

「みちの島」トカラの人々の悲願～汽船もまた道路なり

「生徒たちの楽しみは、船を迎えること、書かせても、作らせても、つづらせても、船ばかり」（十島村教育委員会『十島』）

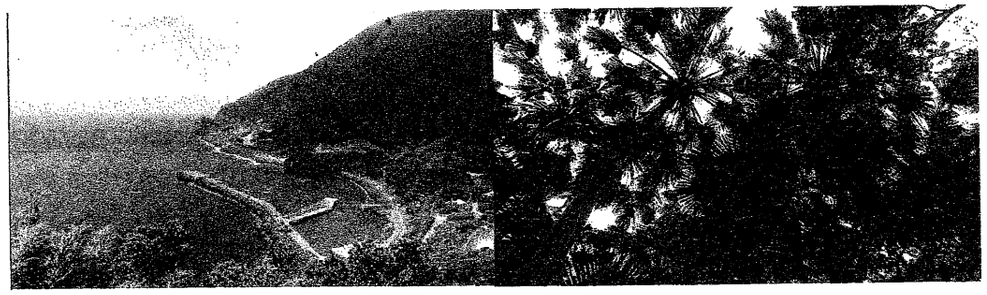
夜中の 23 時に鹿児島港を出航したフェリーとしまが夜明け前の朝 5 時頃に最初の寄港先の口之島に接岸すると、十名前後の島の児童・生徒たちが「ようこそ口之島へ」と書かれた横断幕を持って、3 日も遅れて接岸したフェリーと下船する人々を歓迎していた。船に対するトカラの子どもたちの思いは、名瀬～鹿児島間の村営船航路開設の石碑「汽船も亦道路なり」（文園彰）に刻まれた「ここに島がある限り、人々がそこに住み、そしてまた島々をつなぐ道として、汽船が未来永劫絶えることがないように」という島民の願いとひとつながりのものなのだろう。



都会に暮らしていると、交通手段が 3 日も滞る経験じたいがなかなかないわけだが、トカラではそれほど珍しいことではない。トカラの北域を黒潮の本流が東へよぎり、潮の流れが早いため七島灘と呼ばれ、現在の大型船でもかなり揺れる難所である。1894 年、数社の汽船会社が国の補助金を目当てにこの航路を引き受けたが、汽笛を鳴らすのみで島民をおきざりにして島を離れることが珍しくなく、1～2 ヶ月も島に船が立ち寄らないことがいつものことだった。喜界島出身の文園彰（十島村村長）が国に働きかけて 1933 年に実現した村営定期船の就航はトカラ島民の悲願だった。村営定期船の就航以来の「はしけ乗降作業」は、時化でも小舟で物資や人を運び、命が

けで作業を担う島民たちは毎年のように死者を出しながら村営定期船を維持してきた。

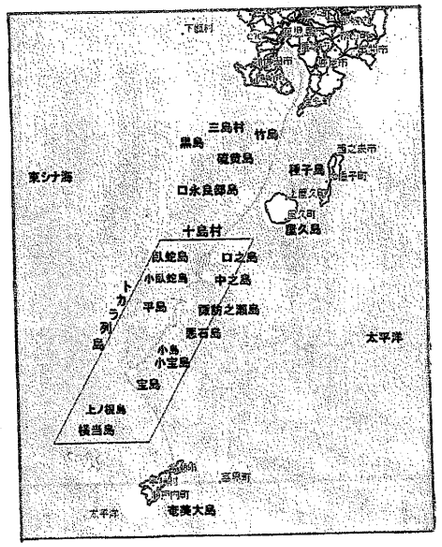
また、かつて「一島中一港湾なし」（白野夏雲／1884）と言われた沖七島は、1952 年離島航路整備法、1953 年 7 月離島振興法と法は整備されても船が接岸できる港はいつまで経っても整備されず、同年 12 月奄美群島の本土復帰（再併合）にともなう「奄美群島振興開発特措法」の指定地域から十島村は除外された。奄美ー鹿児島航路は、難所である七島灘を避け、はるか遠くの沖合を通過した。大都市圏の高度経済成長により急激な過疎化が不便さと格差が相乗しながらトカラの島々にも吹き荒れ、1955 年に 2700 人いた島民は急減した。ようやく 1968 年に中之島の港湾建設が進んだ時には臥蛇島は「はしけ作業」に島民 4 人しか確保できなくなり、1970 年に全員島を離れることになった。その後も港湾建設は遅々として進まず、やっと 1990 年に子宝島に接岸ができるようになり、「国内最後の着岸不可の離島」（『日本一長い村トカラ』2009）は解消された。



1960 年代のルポルタージュである『日本残酷物語 2 忘れられた土地』（平凡社）は、とり残された「みちの島」トカラを次のように記し、時代への強い怒りをもって島民の思いに寄り添う。

「ながい鎖国の時代に十島の人々の目にうつった外の世界の事物といえば、季節季節のカツオ釣りの漁船、薩摩から奄美や沖縄におもむく使節船、またはこれらの島々から薩摩へむかう年貢船、あるいは思いがけなく打ちよせられた漂流船くらいであろう。

そうして近代になり鎖国のとけるときがきた。十島の沖あいを大きな蒸気船がとおり、やがて頭の上を飛行機がとぶようになったが、それらはすべて島をとおりすぎていった。島をおいて去る船や飛行機。島の人たちはそういうものとして新しい文化の片鱗を目にしたのだった。鎖国から目ざめた島が見つけたのは、じぶんたちが忘れられてしまったということであった。



さいはての島にも、「みちの島」にも、それぞれ孤島の苦しみはあるだろうが、とり残され無視されている事実をたえず目にしなければならぬ『みちの島』の孤独はいっそう深いともいえるのであった。」

近代以来追い求めてきた「豊かさ」の果ての時代に生きる今の私たちは、とり残され、忘れられた島トカラとそこに生きる島民を通して、いま一度立ち止まり、私たちがどこに向かおうとしているのかを見つめなおすことが必要なのではないだろうか。

読書会報告（3）

鷲尾 拓

これまでの機関誌でご紹介している通り、私たちは読書会を行っています。現在テクストとして用いている書籍は、ピョートル・クロポトキンの『近代科学とアナーキズム』と、ピョートル・アルシノフの『マフノ運動史 1918-1921 ウクライナの反乱・革命の死と希望』です。

1.『近代科学とアナーキズム』

前号で「次回の読書会で終了予定です」と書きましたが、発表者が病気（風邪）に罹患したため、延期して取り行うことになりました。

ようやく次回の読書会で終了予定です。

2.『マフノ運動史 1918-1921 ウクライナの反乱・革命の死と希望』

非常に浩瀚な書物ですが、峠を越えた辺りに行き着きました。

★ 定例読書会のご案内

たまには少し真面目に本を読もう。それを仲間と共有しよう。どうせならアナキズムに関する本にしよう。現在のテクストは上記の通り、クロポトキン『近代科学とアナーキズム』（中央公論社／1980）、アルシノフ『マフノ運動史』（社会評論社／2003）です。5 月以降、新しく参加者を迎えて定例化することになりました。暫定的ですが、毎月第 4 火曜日の 18 時半～21 時に市民共同オフィス SORA で開催。テキスト・資料代・カンパ 300 円。お気軽にご参加下さい。次回の読書会は 7 月 23 日（火）18 時半～21 時です。

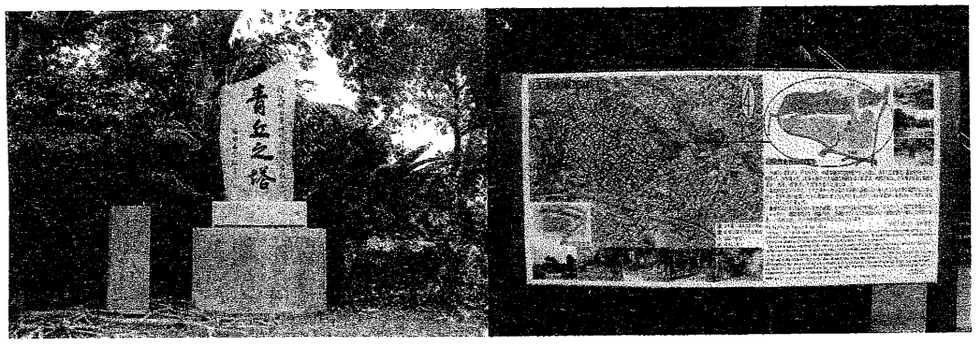
直接会場に来て下さっても結構ですが、事前に下記アドレス宛にご連絡を下されば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

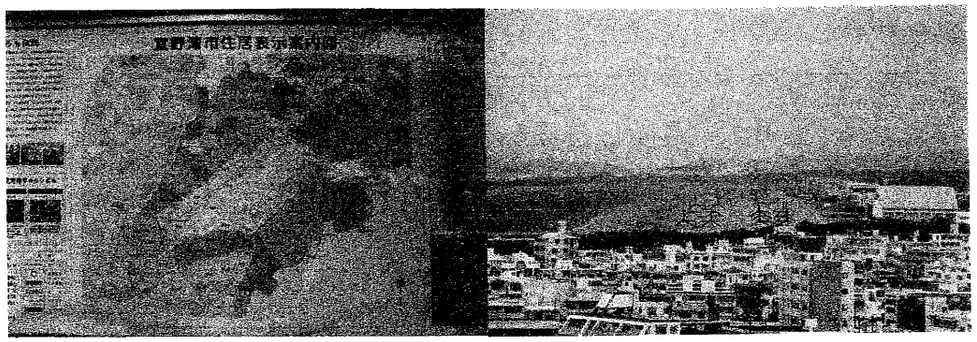
free_workers_federation@riseup.net

活動日誌（抜粋）

3月17日　イルム出版記念集会（ふるさとの家）
3月27～29日　コザ、普天間飛行場（嘉数高台）を巡り、辺野古新基地ゲート前座り込み

※沖縄県民投票で「辺野古の新基地はいらない」という民意が示された後も、土砂投入を続ける日本政府。辺野古新基地ゲート前での沖縄人民の座り込み。何度排除されても歌をうたいデモをしながら抵抗を続ける。



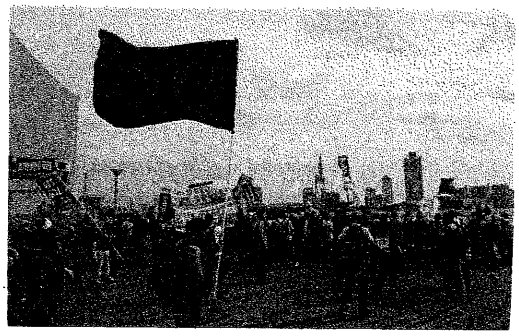


※日本軍が村人を動員して嘉数高台に急ごしらえした前線で、米軍の猛攻により殺された朝鮮半島出身者の慰霊塔「青丘之塔」。その高台からは者の嘉数高台から宜野湾市の市街地を挟んで普天間飛行場が間近にひろがり、劣化ウランをおびたオスプレイが日常的に離着陸を繰り返していた。

4月13日　有象無象のレッツゴー★メーデー実行委員会（労働センター内の野営テント）
4月21日　裏からの政治学習会「オリンピックと芸術」（たみ）、汽水空港見学
4月24日　労働センター閉鎖反対緊急抗議行動
4月27日　天皇代替わりに異議あり！関西集会（エルおおさか）
4月29日　反天集会
4月30日　天皇退位反対集会（西天満）
5月1日　天皇即位反対集会（中之島）、中之島メーデー（剣先公園）
　　有象無象のレッツゴー★メーデー（大淀コミュニティーセンター）

5月7日　奥宮健之墓参
5月9日　アナキズム読書会（市民共同オフィス SORA）
5月19日　関電包囲全国集会
5月24日　労働センター荷物撤去監視行動
5月25日　新天皇・トランプ会談反対集会（PLP 会館）
5月29日　人民新聞国賠訴訟（大阪地裁 201）
6月5日　センター閉鎖をめぐる対労働局交渉
6月6日　アナキズム読書会
6月16日　とめよう改憲！憲法のつどい（エルおおさか）
6月21日　関電株主総会
6月23日　G20 反対集会（新町公園）
6月27日　映画『主戦場』鑑賞（ななげい）
6月28日　G20 反対現地闘争（天保山公園）、香港民主活動家グループとの交流会

目次



★有象無象メーデー声明
★斎藤緑雨－近代日本の自由人たち(4)
★台湾「火焼島送り」をめぐる国会論戦
★朴烈義士記念館を訪ねて
★釜ヶ崎の労働センター閉鎖に対する抗議声明
★南島逍遥(2)トカラ列島～とり残された「みちの島」
★アナキズム読書会報告
★活動日誌

編集後記

◆メーデーに新天皇ナルヒトが即位した。年金や貧困など富の配分をめぐる資本主義の政策や格差社会を問題にしても天皇制＝身分差別は大して問わない労働運動や左翼・リベラルの薄っぺらな感性・論理構築に辟易する。2019年5月1日が日本の労働者階級の歴史的な屈辱の日となったことを心に刻み込もう。今秋は即位の礼や大嘗祭によってナルヒトの神格化が内外にアピールされる。引き続き、反天皇制闘争を推し進めよう。◆ほぼ戒厳令下でG20大阪サミットが6月28－29日に咲洲で開催された。世界のGDPの85%を占める20ヶ国が政治、経済、軍事を取り決め、世界中の民衆にそれを強いる。約250名が海外や日本の各地から天保山に駆けつけ、共にデモを闘った。海外の闘いの足元にも及ばないが、それでも闘わない理由にはならない。金持ちや権力者どもに好き勝手させてはならない。◆いま話題の『主戦場』を組合の仲間たちと観に行った。従軍慰安婦問題について理路整然と語る歴史学者の吉見氏、戸塚弁護士に比して、差別排外主義に満ち満ちた右翼・歴史修正主義者たちの論理破綻した屁理屈が浮き彫りにされて痛快である。一部には日本会議を甘くみる識者もいるようだが、安倍・麻生を筆頭とする日本会議メンバーが20人の閣僚の8割を占めていることは重く受け止めなければならない。◆対イラン有志連合や韓国徴用工問題など予断を許さない状況が続く中、参議院選挙に耳目が集まっている。アベ政権は皇国史観の復活と大日本帝国憲法への回帰を狙った天皇絶対主義の戦争国家体制を標榜しており、その中核である神社本庁に領導された靖国議連は自民党のみならず維新や旧民主党系右派勢力などそのまま改憲勢力の中軸である。そればかりか、日共は国民の8割以上が支持する象徴天皇制に媚び、立憲の枝野ら幹部連中は伊勢神宮に参拝するというように議会内護憲派の質が劣化する中、参議院選挙での野党共闘の勝利のみに収斂させる危険性に自覚的であるべきだ。やつら改憲勢力にとって憲法9条改悪は天皇制絶対主義国家の復活にむけた橋頭保に過ぎない。私たちの側ではそれを見越した日米安保粉砕、自衛隊の南西諸島配備強化阻止、改憲阻止、天皇制国家解体にむけた闘争が準備されなければならないだろう。◆8･6ヒロシマの熱い夏がやってくる。広島無政府主義研究会の呼びかけに応えて8・6広島集会実行委員会で準備中である。列島各地の同志の皆さんの参加をお願いしたい。◆応援してくれる同志・仲間の皆さんのカンパや寄稿、声援により、今号も何とか発行にこぎつけることができた。季刊発行にはまだ及ばないが、これからもよろしくお願いします。(M)

発行：自由労働者連合
宛先：〒540-0038 大阪市中央区内淡路町1－3－11
シティコープ上町402 号室　市民共同オフィスSORA
電話：０６－７７７７－４９３５（呼び出し）
Mail：free_workers_federation@riseup.net
URL：http://federaciodechifonproletoj.wordpress.com/

カンパ送り先：
郵便口座番号　00960－6－145783
加入者名　自由労働者連合

2019年7月16日発行
1部300円